©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

病床から平和願う

パグウォッシュ会議を目前にして

――湯川秀樹

日本ではじめて、この二十八日からの第二十五回パグウォッシュ・シンポジウムが、国立京都国際会館で開かれる。各国持ち回りの会場がここに選ばれたのは「ユカワのいるキョウト」が大きな理由だった。

かつて、あいつぐ米英ソの原水爆実験に全面核戦争の危機を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言（一九五五年）に署名、そして「世界平和七人委員会」の結成（同年）第一回パグウォッシュ会議への参加（一九五七年）……核兵器廃絶を訴え続けてきた湯川秀樹京大名誉教授は、今回は組織委員として自宅から歩いてわずか四、五十分のところで開かれるシンポジウムの準備に懸命だった。しかし、前立腺（せん）肥大症のため五月二十六日、京都第二赤十字病院に入院、手術を受けた。経過は良好だが、なお療養中。

開会式には出席してあいさつを述べることが予定されているものの、討論への参加はとても無理のようだ。その湯川博士が闘病のさ中に、シンポジウムへのやまれぬ期待と訴えを口述。家族が代筆して、シンポジウムを前に朝日新聞社に寄せた。

（題字と署名は湯川氏の直筆）

1975.8.26 朝日

真の核軍縮実現を

世界連邦を見据え

八月二十八日から国際パグウォッシュ・シンポジウムが始まろうとしていることは、すでに新聞などで報道されてきた通りである。科学者のパグウォッシュ平和運動は、今から二十年前のラッセル・アインシュタイン宣言に端を発している。それは人類の存続のために科学者が国際的な会議を開くことを訴えたものである。

宣言の中で人類の存続のためには戦争の廃絶と核兵器の廃絶が不可欠であることが強調されている。当時この宣言に署名した学者は、ほとんど死去された。今回のシンポジウムの出席者の中では、私のほかにはイギリスのロートブラット氏だけしかいない。この宣言の呼びかけに応じて一九五七年に第一回の会議がカナダのパグウォッシュという大西洋岸の小さな村で開かれ、日本から朝永振一郎、小川岩雄の両氏と私とが出席した。それ以後、何十回も会議が開かれ、参加者もだんだんとふえてきた。今回はじめて日本でシンポジウムが開かれることになり、事務局長の豊田利幸氏をはじめ、関係の人たちが準備に忙殺されてきた。今回の会議は比較的小規模であるが、後述のように私たちはこれに大きな意義をあたえることができると信じているのである。

ところが昨年から身体の調子の悪かった私は、今年の五月になって、前立腺肥大に原因する膀胱炎と腎盂（じんう）炎を併発していることがわかり、京都第二赤十字病院の古沢医師の勧力で、六月に手術を受けた。その結果、一時は順調に治ってきたように見えたが、間もなく前立腺がすでにガン化していたことがわかり、さらに七月にはその転移を防ぐための第二回目の手術を受けることになった。そのために入院も長びき、健康体への回復も遅々として進まなかった。私にとっては、生まれてはじめての深刻な体験であった。それだけに古沢医師や病院の多くの人たちの手厚い看護を、身にしみて感じたのである。

それともう二つ、二か月半の間、ずっと病院に泊まって昼夜をわかたず、自分の健康を犠牲にして付きっきってくれた妻スミの献身的な努力に、心の底から感謝している。入院中、見舞客から、ある病人の妻が看護に疲れて、病人より先に死んだという話を聞かされたりして、今さらのように妻に対する思いやりが足りなかった自分を反省させられたのである。

そうこうするうちに、パグウォッシュ会議の開会も迫ってきたので、私も気が気でなく、まだ食欲不振、貧血、足腰が弱っている状態の中を退院させてもらって、転地療養することにした。そして、せめてはパグウォッシュ・シンポジウムの開会式であいさつできるまでにこきつけたいと健康回復に努力してきた。

ふりかえってみると、この二十年間に、パグウォッシュ会議に参加する科学者の数は非常に増加したが、回を重ねるごとに、核兵器の廃絶というラッセル・アインシュタイン宣言の当初の目的達成の意欲はうすれ、米ソ両大国が強大な核軍備を保持したままでの均衡状態を続けることができたらそれでよいという考え方をする人が多くなってきた。それではしかし核軍縮よりも、むしろ核軍拡に向かう傾向を抑えることができない。

今回の会議では、こういう現状を打開して、真の核軍縮を実現するための具体的な方策について討議し、さらにそれらを実現の難易に従って順序づけた全体計画の提案にまで話を進めることが企図されている。もちろん世界平和の達成は、核軍縮だけで終わるのではなく、全面完全軍縮の達成、さらには各国が軍備を持たない世界での各国の安全を保障できるような世界的機構の樹立――それはつまりは世界連邦の実現――という方向に進んでゆかねばならない。少なくとも私自身はそう信じている。

しかし今回の会議では特に核軍縮に的をしぼって、立ち入った議論がなされることになった。この他に科学と倫理、科学者、技術者の社会的機能が重要なテーマになっているが、核軍縮だけでなく、これらの諸問題の解明にも、この会議が大きな貢献をすることを期待している次第である。

c092-17-041